



Community 4 Children

地域は子どものために、子どもは地域のために

Children 4 Community

一般社団法人コミュニティ・4・チルドレン
2022年度事業報告・決算書
(2022年6月1日～2023年5月31日)
2023年度事業計画・予算書
(2023年6月1日～2024年5月31日)



連絡先：一般社団法人コミュニティ・4・チルドレン
〒545-0021 大阪市阿倍野区阪南町1丁目45番1-302号
電話 06-6622-5645 /Fax 06-6621-7139
E-mail community_4_children@yahoo.co.jp

はじめに

一般社団法人 コミュニティ・4・チルドレン（以下、C4C）は、長期化するコロナ禍の影響を受けながらも4か国のパートナーと共に、つながりを強めながら創意工夫をこらした取り組みを進めることができました。これもひとえに皆様の温かいご支援のおかげと感謝申し上げます。ここに、2022年度（2022年6月～2023年5月）事業報告をいたします。

2022年度の様子を少しご紹介しますと、コロナ禍に入り継続的に開催してきた4か国ミーティングや各国の活動の様子を知り、活動に主体的に参画している皆さんの思いや展望などを聞く活動交流などオンラインを活用した取り組みを行いました。お互いの刺激となり、活動意欲の向上につながっていますので、今後も継続していく予定です。

カンボジアでは、昨年11月1日にスタートしたチュロイスナオ村のコミュニティ図書館建設プロジェクトは、村の皆さんの尽力と日本からのご寄付によって5月末に無事に完成いたしました。

各国では、コロナ以前の事業の正常化に向けた努力を続け、一方で事業の縦横の展開を進めていますので事業報告に目を通していただきますようよろしくお願いいたします。

2023年度は、現地での実施事業の調整や相談対応の現地訪問や会員・寄付者をはじめ日本の皆さんに現地を知っていただくスタディツアー、またI Do Caféを順次再開していきます。C4C便りやホームページ、ブログ等を通じて、現地情報や参加型企画についてお伝えしてまいりますので、関心を持って見ていただきますと共に、ご参加いただければ幸いです。



～ 目 次 ～

・ はじめに	- i
・ 2022 年度事業報告書	- 1
1. NGO 支援事業	- 1
1-1. 海外支援事業	- 1
A. フィリピン国 JPCOM-CARES 支援事業	- 1
B. タイ国ノンメック村コミュニティ支援事業	- 9
C. 海外プロジェクト助成事業	- 16
1-2. 国内支援事業「宮城県における連携・協働で取り組む福祉・防災学習推進事業」	- 17
2. 文化交流活動支援事業	- 20
2-1. スタディツアー	- 20
2-2. カンボジア・コミュニティ図書館建設応援サポーター募集キャンペーン	- 20
2-3. Zoom でつなぐ C4C4 か国会議—国際ネットワーク交流	- 20
2-4. カンボジアとつなぐオンラインイベント	- 21
3. 視察・研修・ワークショップなど	- 21
3-1. 研修事業	- 21
3-2. 国内 IDoCafé 事業	- 21
4. パートナーシップ推進事業	- 21
5. 情報提供事業	- 22
6. 組織運営	- 22
・ 2022 年度貸借対照表	- 23
・ 2022 年度財産目録	- 23
・ 2022 年度決算報告書（損益計算書）	- 24
・ 2023 年度事業計画書	- 26
・ 2023 年度事業予算書	- 29

2022年度(2022年6月～2023年5月)活動報告

1. NGO 支援事業

1-1. 海外支援事業

フィリピン国 JPCOM-CARES とタイ国ノンメック村と連携し、運営・活動を支援してきました。またカンボジアの NGO/Khmer Community Development と協働で、ベトナム国境近くの農村の子ども会活動および有機農業推進活動の支援を実施しました。

A. フィリピン JPCOM-CARES(フィリピン国バギオ市、ベンゲット州カバヤン町)支援事業

JPCOM-CARES(ジェイピーコム ケアーズ)は、必要な公共サービスや社会資源が限られた山岳部バギオ市、ハッピー・ハロー村(バギオ市内)、カバヤン町を拠点に、しょうがいのある子どもや青年層が地域で自立し尊厳のある暮らしを営める地域づくりに取り組んでいます。

◆事業対象者数(人)

2022年6月～2023年5月の期間、下記のしょうがいのある子ども・青年を対象に事業を行いました。

地域	人数
バギオ市、ラ・トリニダッド町、サブラン町、イトゴン町、トゥバ町	97人
ハッピーハロー村、ジブラルタル村、その他複数村	26人
カバヤン町	60人

1.リハビリテーション&保健プログラム

(1)リハビリテーションセンターSTAC5(スタックファイブ)での理学療法・作業療法

バギオ市にあるリハビリテーションセンター「STAC5:Stimulation & Therapeutic Activity Center 5」では、あらゆるしょうがいを持つ子ども・青年を対象に、一人ひとりについてアセスメントし必要な理学療法、作業療法の療育支援を計画して個別ケアを行っています。

今年度は、新型コロナウイルス感染症による移動制限やコミュニティ隔離措置などが大幅に緩和されたため、リモートでの療育支援から、感染対策を講じて子どもたちに直接療育支援を行いました。

作業療法では、日常生活動作や手先の巧緻性を高める練習、読み書き計算、言葉の習得や発声・活舌の練習、集中力や社会性の習得などの療育を行いました。認知力やコミュニケーション力の向上、ニーズや欲求の発信方法の獲得、感情コントロールの習得など、一人ひとりに変化がみられました。

理学療法では、一人ひとりの身体状態に合わせて、必要なエクササイズや運動を実施しました。保護者にも療育に参加してもらい、家庭でできる運動の指導を行いました。壁や支えがあれば歩けるようになった、座位が安定してきた、歩行バランスが向上し転倒が少なくなった、筋肉の緊張の軽減や身体の使い方など、様々な変化がありました。各家庭の事情により、不定期で療育支援に参加する一部の子どもたちは、状態が後退する様子も見られ、定期的に継続して療育に参加してもらうことが課題となっています。

◆リハビリテーションセンター利用登録者数(人)

理学療法	作業療法	IL プログラム	計
22	29	6	57

◆リハビリテーションサービス提供数(回)

理学療法	作業療法	ILプログラム	計
980	1,234	119	2,333

(2)ビタミン剤、医薬品、感染予防・衛生用品セットの提供

子どもたちや保護者が、健康的な暮らしを営めるように、ビタミン剤や一般的な風邪薬、鼻炎薬など、必要な医薬品の提供を行いました。ビタミン剤は、3ヶ月ごとに提供し、子どもたちの健康観察を行いました。良好な体調を維持できた子どももいましたが、寒暖差が激しい季節には、咳や風邪、発熱、下痢、喘息症状などあり、通院や服薬が必要な子どももいました。

小児科協会、病院、ライオンズクラブ、協同組合、看護学生協会やコカ・コーラなど、多数の地域団体や一般企業から物資の提供にご協力いただき、健康補助食品、紙おむつや口腔ケアなどの日用品、新型コロナウイルス等の感染症からの予防を目的とした衛生用品セットも提供しました。



(3)医療サービスや医療機関の紹介・照会

リハビリテーションセンターSTAC5での適切な療育計画、支援の効果や変化を見極めるため、連携する専門医・医療機関と繋ぎ発達評価をしていただきました。今年度は、19人の子どもたちを繋ぎました。

(4)保健プログラム

子どもたちやご家族の健康の維持・向上、病気の早期発見を目的に、以下の取り組みを行いました。

実施日	場所	人数	内容
8月25日	STAC5 (バギオ市)	子ども・ご家族 13人	希望する子ども・ご家族に対して、コロナワクチンの接種を行いました。公共の接種会場では難しい子どもたちも、スタッフが介助することで、落ち着いて接種することができました。
10月20日	STAC5 (バギオ市)	利用者19人 ご家族13人	STAC5の25周年記念行事として保健フェアを開催しました。小児科医8名、栄養士1名、呼吸器科医1名、発達小児科医2名の協力を得て、無料で専門医の診察、服薬のアドバイス、食事指導、血圧測定などを行いました。
3月21日	STAC5 (バギオ市)	保護者20人	産婦人科医の協力を得て、保護者の乳がん・子宮頸がん検診を無料で実施しました。早期発見のための自己触診の方法なども周知しました。

(5)セミナー&研修

保護者や地域関係者のしょうがい児・者への知識や理解を深めることを目的に実施しました。

●リハビリテーションセンターSTAC5の保護者を対象としたセミナー&研修

実施日	地域	参加人数	活動内容
8月25日	バギオ市	保護者7人	【しょうがいの早期発見・予防・介入セミナー】 STAC5の新規利用者の保護者を対象に、しょうがいの早期発見・予防・介入の重要性、基本特性について説明を行いました。参加した保護者からは、自身の子どもについて理解が深まった、行動の修正を行う方法を知ることができた、他のお母さんたちの経験や方法からアイデアを得たといった声がありました。また、自治体が行っている支援やIDカードの申請方法などの情報共有も行いました。
10月13日	バギオ市	保護者5人	
10月19日	バギオ市	保護者8人 子ども7人	【理学療法のスキルアップ研修】 理学療法を受けている子どもの保護者を対象に、各家庭で定期的・継続的にエクササイズを実施できるように、理学療法士による技術研修を行いました。
3月1日	バギオ市	保護者 18 人	【基本的な救急救命方法を学ぶ研修】 バギオ市の災害リスク軽減管理事務所の協力を得て、窒息・溺水・心停止・呼吸停止時の適切な対応、心肺蘇生や包帯の巻き方など、救急救命方法について学びました。

●地域を対象としたセミナー&研修

実施日	地域	参加人数	活動内容
10月6日	バギオ市 (Minesview)	20人	【しょうがいの早期発見・予防・介入セミナー】 各地域のしょうがい児・者の健康と福祉を促進するため、しょうがいの早期発見・予防・介入の重要性、基本特性や関連疾患について説明を行いました。自治体役員、評議会メンバー、地域の青年組織、ヘルスワーカー学校関係者、幼稚園教諭、当事者グループやご家族など、多数の方々にご参加いただきました。ディスレクシアの子どもへの支援方法や発達評価を受けることができる病院や医師の情報など、参加者の質問やニーズにも対応しました。 今後、しょうがい児・者の地域社会の参加を妨げる様々なバリアをどのように取り除いていくことができる
4月19日	ラ・トリニダッド町 (Beckel)	40人	
4月25日	バギオ市 (Middle Rock Quarry)	33人	
4月26日	ラ・トリニダッド町 (Lubas)	26人	
4月27日	バギオ市 (Happy Hallow)	21人	
4月28日	ラ・トリニダッド町 (Ambiong)	25人	

5月17日	カパンガン町 (Cayapes)	69人	のか、参加者自身で具体的な行動計画を策定することを目指しています。
-------	---------------------	-----	-----------------------------------

(6)IL プログラム(自立生活プログラム)

しょうがいを持つ子どもや青少年6人を対象に、家庭や地域社会で自律・自立した暮らしができるように、生活スキル、社会のルールやマナー、コミュニケーションスキルの習得や向上を目指したプログラムの提供を行いました。

習得ペースには個人差があり、積極性も日によって違いましたが、大好きなアクセサリーブづくりを取り入れることでモチベーションを維持したり、それぞれの得意に合わせてプログラムづくりを行いました。また、オープンスペースでは落ち着かないなどの苦手に対しては、環境を整えたり視覚支援を行うなど、配慮しながらサポートを行いました。

実施回数	プログラム内容
119回	<ul style="list-style-type: none"> ✓コミュニケーション&マナー (挨拶、会話、非言語コミュニケーション、アイコンタクト、話を聞く、敬語の使い方) ✓身だしなみ (保清、着衣、トイレの使用方法、足・爪・耳・脇・髪・鼻・顔・口腔内のケア) ✓家事技術 (掃除、皿洗い、テーブルセッティングと片付け、ゴミの分別、洗濯、洗濯たたみ、床拭き、モップ掛け) ✓調理技術 (食品の準備、衛生管理、包丁の使い方、ガスコンロの使い方、調理、片付け) ✓お金の管理 (小銭と紙幣の種類、予算の立て方、節約・貯蓄、お金の使い方) ✓裁縫技術 (枕カバー制作、ハンカチ制作) ✓アート&クラフトづくり (ビーズアクセサリーブづくり) ✓健康維持 (体力づくり、エクササイズ)

2.教育支援

(1)奨学金の提供

バギオ市10人、カバヤン町14人の子どもに、奨学金を支給しました。新型コロナウイルスの影響により、約2年間対面授業が実施されていませんでしたが、2022年度は徐々に対面授業が行われるようになり、子どもたちも保護者も、待ちに待った再開にとっても喜んでいました。

(2)学用品の支給

子どもたちの継続した学びをサポートすること、保護者の経済的な負担を軽減することを目的に、バギオ市と周辺地域20人、カバヤン町15人の就学中の子どもたちに学用品の支給を行いました。ノート・マーカー・色鉛筆・鉛筆・鉛筆けずり・消しゴム・のり・物差し・テープ・ホッチキス・はさみなどの文房具一式、水彩絵の具をセットにして一人ずつに支給しました。

3. 保護者のエンパワメント

(1) 生計向上プロジェクト

2020年3月、新型コロナウイルスの影響により、必要な食糧の確保と野菜販売での副収入の獲得を目的に、希望する保護者3人を対象に、野菜の種・ポット・堆肥をセットにした軒先ガーデニングキットを提供しました。現在、1人の保護者が続けて取り組んでいます。他の保護者は、コロナ禍中から活発になってきたオンラインビジネスに注力し、古着や服飾雑貨、観葉植物、乾物、冷凍食品などの販売を行っています。そういった保護者のサポートを目的に、デジタルマーケティングについて学ぶ研修の場を設けました。

(2) ワークショップ・研修・行事

保護者が集い、悩みや気持ちを聞き合う場づくりを行いました。また、保護者が安定して収入を得ていけるように、生計につながる研修事業も行いました。

実施日	場所	人数	内容
7月29日	バギオ市	3人	【父親のためのコーチングとシェアリングの会】 子育てに取り組む父親が、互いの実践から学び、心身の健康を促進することを目的に実施しました。自分たちの経験や悩みをオープンに話し、意欲的に互いから学ぼうとしていました。
10月21日	バギオ市	6人	【第1回 ヘアケアとフットスパ技術研修】 ヘアケアやフットスパで生計を立てる保護者がトレーナーとなり、関心ある保護者に対して技術指導を行いました。参加者した保護者は、ヘアケアやヘアカラーの技術を熱心に学び、第2回を希望する声があがりました。
11月28日	バギオ市	11人	【身体しょうがい児の保護者の集い】 新規理学療法利用者の保護者のネットワークづくりを目的に実施しました。多くの保護者が、似たような悩みを抱えていることがわかり、互いの経験を聞き合い、自身の子育てにヒントを得ることができました。
11月18日	バギオ市	5人	【第2回 ヘアケアとフットスパ技術研修】 10月に実施した第1回のフォローアップ研修を実施しました。参加者の関心が高く、新たに、マニキュアやペディキュアの技術研修を行い、楽しみながら新しい技術を習得していました。
2月2日	バギオ市	3人	【デジタルマーケティング研修】 コロナ禍により、オンラインビジネスを始めた保護者が増えたため、貿易産業省の協力のもと、販売戦略やガイドライン、顧客獲得方法やコツなど、デジタルマーケティングに関する研修を行いました。オンラインビジネスを始めたい人への資金援助の情報も提供いただきました。
3月21日	バギオ市	20人	【子宮頸がん・乳がん啓発講演会】 産婦人科医の協力を得て、保護者の乳がん検診、子宮頸がん検診を無料で実施しました。また、早期発見のための自己触診の方法なども周知しました。

(3)保護者会支援

今年度も、活動のパートナーである保護者会の役員とともに、活動計画を策定し取り組みました。保護者の生計支援の一環として実施した「ヘアケア&フットスパ研修」は、保護者が持つ技術を他の保護者へと共有する初めての試みとして、2回実施することができました。今後も継続して実施していくこと、次回は、フェイシャルスパとメイクアップ技術研修も追加し行っていくことなど、様々なアイデアが出され、計画を立てることができました。

4. 権利擁護・コミュニティ啓発活動

アドボカシー活動として、地域関係者のしょうがい児・者への知識や理解を深めることを目的に、7つの地域で234人を対象に、「しょうがいの早期発見・予防・介入セミナー」を実施しました。

※詳細は、【1.リハビリテーション&保健プログラム】の【(5)セミナー&研修】をご参照ください。



5. ネットワークづくり・社会資源の活用

(1)ネットワークづくり

地域パートナーや各関係者・機関とのネットワーク構築のため、下記の行事を実施しました。

実施日	行事	参加人数	内容
9月13日	奨学生の集い	奨学生10人 保護者・家族10人	奨学生のネットワークづくりを目的に実施しました。次回は、バードウォッチングやピクニックをしたいと、子どもたちからアイデアが出ました。
9月23日	法律・政策・財政支援に関するセミナー	子ども4人 保護者・家族17人	社会福祉開発（CSWD）の協力のもと、しょうがい児・者のための法律や政策、財政支援プログラムについて情報提供を行いました。
10月20日	STAC5設立25周年記念行事&保健フェア	子ども21人 保護者29人	STAC5 設立25周年を記念し、小児科医など地域パートナー23人の方々にもご協力いただき、保健フェアを実施しました。
11月19日	奨学生と自立生活プログラム参加者の集い	子ども9人 保護者12人	子どもたち同士の交流を目的に、公園でレクリエーション活動を行いました。子どもたちは、ゲームやダンスに積極的に参加し、公園の草花の自然を楽しんでいました。保護者からもとてもリラックスできたという声が聞かれました。
12月9日	クリスマスギフトギビング	子ども21人 保護者32人	北ルソンフィリピン小児科学会、バギオライオンズクラブのご協力のもと、薬や食品などの日用品が入ったクリスマスギフトをプレゼントしました。
12月20日	年末&クリスマスの集い	子ども55人 保護者89人 関係者37人	今年度は数年ぶりに、関係者が一堂に会し実施しました。子どもたちだけでなく、保護者・家族、パートナー団体も含め、ともに過ごせる喜びとともに、楽しい時間を過ごすことができました。

2月1日	エコセラピー	子ども16人 保護者26人	自閉症月間(1月)とダウン症月間(2月)を記念し実施しました。自然の中でゲームをし、子どもも保護者も楽しく交流しました。
3月3日	エコウォーク& 森林ピクニック	子ども13人 保護者16人	ラ・トリニダッド町役場の協力を得て、子どもや保護者の運動やリラクゼーションを目的に実施しました。新鮮な空気の中、保護者も安らぎリラックスできた様子で、「ほっと一息できた」と話していました。
4月4日	温水療法	子ども11人 保護者24人	理学療法を受ける子どもたちを対象に、温水プールで温水療法を実施しました。可動域の訓練やストレッチなどのエクササイズに加えて、浮具を使用し緊張した筋肉をリラックスさせる方法などを実践しました。
5月29日	母の日の集い	保護者17人	療育サービスに参加する子どもたちの母親が集い、子どもの成長の喜びや、互いへの日ごろの感謝の気持ちを共有しました。



(2)社会資源の活用・コーディネート

今年度も、様々な地域パートナーや個人から、活動の協力依頼や物品寄付を提供いただき、必要とする子ども・ご家族に届くようにコーディネートを行いました。

●自治体(社会福祉開発局)等の支援のコーディネート

市やコルディリエラ行政区の社会福祉開発局や民間の財団が、療育支援や医療が必要な子どもを対象に行っている経済支援、貧困家庭への財政支援の申請を行い、今年度は、11人が補助金3,000～7,000ペソを受け取りました。また、新規ビジネスをサポートする生計支援助成金の申請を行い、2人の保護者が15,000ペソの現金支援を受け取りました。

3月には、コルディリエラ行政地域社会福祉開発局現地事務所より、しょうがいのある子どもとご家族のための財政支援基金のコーディネート依頼を受け、バギオ市と周辺地域の96家族、カバヤン町の10家族の申請手続きをサポートしました。各家庭は3,000ペソを受け取り、物価が高騰する中、家計を支援することができました。

●コミュニティパントリーの設置

様々な個人や連携する団体より、食料品や感染予防グッズ、医薬品等を寄付くださいました。リハビリテーションセンター内にコミュニティパントリーを設置し、必要とする子どもやご家族に、自由に持ち帰っていただきました。

(5)ファンドレイジング活動

自主財源の獲得のため、以下の取り組みを行いました。

●募金箱の設置

今年度は、15ヶ所のオフィスやレストラン等に募金箱の設置にご協力いただきました。年間通じて、6,560ペソ(約17,000円)の寄付が集まりました。

●ラッフルプロジェクト

地域パートナーより景品の一部を提供してもらい、抽選会を4回実施しました。約36,000ペソ(約95,000円)の資金を得ることができました。

【成果と課題】

今年度は、人の動きも町の様子もコロナ流行以前の様子に戻ってきました。子どもたちにも、以前のようにリハビリテーションセンターに来所してもらい、直接、療育支援や自立生活プログラムを提供できるようになりました。リモート支援では得にくかった療育を通じた効果や、少しずつ起きている子どもたちの変化を感じることができ、保護者やスタッフも嬉しく思っています。しかし、中には基礎疾患を持つ子もいるため、引き続き感染予防を行いながら取り組んでいます。また、人が集っての活動や地域に出向いての研修なども開催できるようになりました。特に今年度は、7つの地域と連携し、234人の自治体関係者や地域で活動する方々に対して、しょうがい理解セミナーを開催することができました。保護者の生計支援の一環として実施した「ヘアケア&フットスパ研修」は、保護者が他の保護者へと技術共有する初めての試みでしたが、参加者が意欲的に学び、切磋琢磨する機会となりました。

課題として、地域の啓発活動を目的にセミナーを開催した各地域において、しょうがい児・者の地域社会への参加が促進されるよう、参加者自身が考え活動を作っていけるような関りができないかと模索しています。また、自主財源の確保や地域の方々の活動への参加促進、自治体や関係者とのネットワークづくりに取り組んでいたチャリティ・ランやチャリティ・ズンバについても、状況を見極めて再開したいと考えています。

B.タイ国ノーンメック村コミュニティ支援事業

コンケン県ノーンメック村において、子どもを見守ることができるコミュニティ作りを応援する様々な事業を展開しています。大人たちが自分たちのコミュニティの中で絆を強化し、農民としての生き方に自信を持ち、経済的にも自立できるようになることが、子どもたちを健全に育てる基盤となります。そのため事業は、有機農業普及と伝統文化の復興を柱に自然と共存しながら収入の向上を図ろうとしてきました。

2022年度は、新型コロナウイルス感染症に対する様々な規制がなくなり、経済・社会活動はほぼコロナ蔓延前に戻ってきました。本事業の活動も少しずつ活発化し、今は主に実験農場で行うようになりました。

実験農場は、学習の場を提供するだけでなく、2022年5月からコミュニティ・マーケットの場としても開放されるようになりました。これまで有機農業普及や植林活動などを通じて、身近な自然資源を有効利用しようと重ねてきた努力が、市場開発という方向に集約され、環境に優しい経済、「足るを知る農業」の実践の可能性が見えるようになってきました。

1. 有機農業の普及

◆子どもとコミュニティのための有機農業実験農場での稲作

@アレンヤー実験農場(村人から無償で田んぼを借りています)

参加者:ノーンメック村と周辺村の大人、青年、子ども、僧侶

無償労働交換である『結』で田植えと稲刈りを行うことは、自分たちのルーツや文化を忘れないためにも重要です。『結』を復活させて7年目を迎えました。今年度はノーンメック村住民だけでなく、周辺村落やコミュニティ・マーケットで出会った他県の有機農家も参加してくれ、米の収量も肥料袋 32 袋(もみ付き米で約1,300kg)を得ました。

土地改良のために、緑肥(マメ科植物であるサンヘンプ)と堆肥・液肥を継続して投入しています。土地の質を確実に向上させているようです。またこのようなマメ科の植物を稲作後に植えることによって、雑草除けにもなり、土が水分を含むようになります。2022年度は雨がよく降ったため、5月時点で田植えに向けた田起こしはまだ行っていません。



日時	参加者・人数	活動
6月11、12、13、23、29日	ノーンメック村住民とスタッフ4-6人	田植えの準備;雑草刈り、水入れ、苗床作り
7月7、11、14日	4人	
8月3、6日	4-6人	田植え用に苗準備
8月7日	ノーンメック村および他村住民35人 内大人21、青年3、子ども8、僧侶3	『結』田植え
8月10、15、21、24日	4人	田んぼの状態確認
9月3、15、23、28日	3-4人	田んぼの水の調整、堆肥投入、除草
10月4、17、22、31日	4人	雑草抜き
11月1、7、10、18、19日	5人	稲刈り準備

11月20日	31人 内大人24(女16男8)、青年3(男3)、子ども4(女2男2) ノーンメック村および近隣村住民、他県のネットワーク・グループ	『結』稲刈り
11月25, 27, 28日	12人	稲の運搬、脱穀、米蔵へ入れる
12月25日	4人	緑肥(サンヘンブ・マメ科植物)播植

◆自立のための農業普及活動

新型コロナウイルスの影響で、人々が集まることが困難になった時期に、ノーンメック村とその周辺村の人々の求めに応じて、有機農業を続けられるように、月に2~3回、10軒程度の田畑を訪問しました。有機農業の多角経営を目指す農家の収入向上を目指して、現場で技術指導、相談、種苗配布・分配などを行い、その後、持ち回りで田畑の所有者である家族が食事を用意し、関心のある人々が自由に参加できる小さな交流の場となりました。



コロナ感染症による影響がほぼなくなり、少しずつ集まる活動が再開される中、交流はますます活発になりました。多様な植物が植えられるようになり、お互いの農法の情報交換、2022年5月に始めたコミュニティ・マーケットで販売する食材や加工品などのアイデアもこのような場で話されるようになりました。

そして有機農業の実践に本気で打ち込もうと、いくつかの家族が新たに家屋を田畑に建てて、生活の中心を移しました。

3月19日には、実践農場において、堆肥・液肥作りの研修を行いました。ノーンメック村から17人(女14、男3)が参加し、他県から2人の有機農業実践者を講師として招き、様々な経験を共有し、実際に参加者もバナナや木の葉から堆肥を作りました。堆肥や液肥の需要は高く、近年の化学肥料価格やガソリン代の高騰、土地力の低下、そして新型コロナウイルスなどの感染症の蔓延と健康に対する危惧などもあったため、自分たちで自然の素材から肥料を作ることを選ぶ農民が増えました。

また5月20日には、アレンヤー実験農場に23人の有機農業実践者と関心のある人たちが集まり、セミナーと交流を行いました。他県から招いた有機農業実践者から有機農業、農業の多角経営、堆肥、EM団子など、自分の土地でも実践しやすい情報を学ぶとともに、マーケットやそれぞれの家族の農業経営計画などを話し合いました。そして次の日には、苗木とEM団子を家庭でも利用してもらうために有機農業を実践する人たち22人に配布しました。

2. コミュニティ文化の継承

◆寺院やコミュニティでの行事参加@ノーンメック村寺院、ノーンメック村内

日時：6月11、26日、7月20、22日、8月5、20日、9月10、18、25日、10月3、10日、11月19、20、21日、12月13日、1月4、8、10、15日、2月20日、4月9日、5月27日

雨安居期の仏日、村人の葬式、仏教行事、子どもの日の行事、水かけ儀礼などの際、スタッフが子どもたちを連れ、飲み物を差し入れ、行事のお手伝いをしました。1月4日には有機農業実践農場で収穫した米(もみ付きを肥料袋2袋)を、求めに応じてノーンメック村と近隣村の村人21人に配布しました。タイ正月には実験農場に

長老たちを招待し、健康や長寿を願う水かけ儀礼を行いました。過去数年間、新型コロナウイルス感染症拡散を防ぐため、年配者を一か所に集めるような行事が行われてきませんでした。2022年度は、多くの集合儀礼を行うことができました。

3. 森林保護・保全、有効利用活動

◆植林@ノーンメック村公共地(約 15 ライ、1 ライ=1600 平方メートル)

森を愛する心を育て、自然資源を適切に利用するため、将来も森林を利用することができるように森林保護活動を続けています。5年前からそれまで私有地との境界が不明瞭だった村の公共地に柵を建てて、村人たちの手で植林し、森を保護し管理するようになりました。そして7月11日、雨季の始めに無償で助け合う『結』の伝統を復活させ、村人と一緒に500本の苗木を植えました。



定期的にスタッフや住民による見回りや世話を続けており、水牛を勝手に放牧して苗を食べさせていた飼育者の元を訪れて注意するようにしています。これまでの継続した森林保護活動によって、キノコなどが多く生えてくるようになりました。

日時	参加者	活動
6月8、13、18、27日	ノーンメック村住民9人	下草伐採、土地の整備、苗木準備
7月11日	ノーンメック村および周辺から村人30人(女11男10、子ども2、青年2、僧侶3、スタッフ2)	『結』による植林
7月17、23日	ノーンメック村住民2-4人	下草伐採、土地の整備、植林
8月5、21日		苗木の成長の状態視察
9月5、22日		公共林の状況を見まわり
10月4、21日		除草、下草伐採
11月13日		
4月7、24日	ノーンメック村住民3人	見守り、追肥、次の植林計画を立てる

◆植林と自立のための農業モデル村から学ぶ視察・研修

3月25日@カラシン県ドーンチャーン郡ナーチャムパー区ドンクルアイ村農協、王立農業博物館カラシン・センター 参加者:ノーンメック村住民17人(女13、男4)

今回視察・研修を実施した場所は、2014年に土地改革局が、貧困対策に従って貧困層に土地を割り当て、移住を促し作った村です。当初の計画の90世帯のうち75世帯が実際に移住し、主に有機農業、牛、鶏や魚の養殖などに従事しています。そのうち4世帯の田畑を見学し、移住してから現在に至るまでの経験を共有しました。

ある家族は、移住してきた当初、割り当てられた土地が砂地で、何も植えることができないことに驚きました。水路も電気もない状態で、自身も農業の知識がなく、バケツで池から水を汲むことから始め、約10年間苦勞して土地を改良し、様々な植物を植え、魚やコオロギを飼い、現在では家族を十分に養うだけの収入を得ることが

できるようになりました。1 年を通じて収入が得られるように、植えるものや植える時期、飼うものや飼う時期を前もって計画して実施するやり方を見せてくれ、研修参加者たちは農業経営の重要性を学ぶことができました。

◆水利管理研修

5月21日 @アレンヤー実験農場

参加者：ノーンメック村および周辺村の農民 19 人

2020 年 3 月より定期的に起こる干ばつに対処するため、地下水をうまく管理・利用するための視察・研修を行ってきました。アメリカ発の水利管理システムのことで、毛細血管現象などを利用し、乾燥した東北地方の土地に適しているため、得た知識を自分の土地で応用実践する人が増えました。そして自分の経験を他の人々に伝え始めました。

コロナ感染症拡大以降、実験農場で近隣村住民だけで実施しましたが、今回はコミュニティ・マーケットで出会った人も何人か参加しました。すでに研修に参加して水利管理の実践をしているレックさん(実験農場の土地の所有者)がどのように地下水を引き、井戸や地下の水源を管理しているのかについて説明し、参加者は水利管理について学んだ後、自分たちの手で実践しました。

今後もノーンメック村の有機実験農場に貯水モデルを構築する取り組みは続きます。

4. 健康向上プロジェクト

2月20日 @アレンヤー実験農場

参加者：ノーンメック村と隣村の住民 25 人

病を知り、身近なもので自分や家族を癒すために、病気や治療法、特にタイ方医学の知識を学び、実生活に応用できるように 2021 年度から安全な食や生活習慣に気を付けて健康を増進させる研修を始めました。

「病・薬草・処方」についての情報をタイ方医であるレックさんから学びました。身近なところで見つけることができる薬効のある植物の知識、医薬同源の原理、ハーブの利用法などを学びました。学ぶ場であるだけでなく、お互いの健康に関する情報交換の場でもあり、各人の悩みを聞いていくと、糖尿病、腰痛、甲状腺機能障害、肥満、目、アレルギーなど多くの病気が身近に多くあることがわかりました。また、参加者みんなで家庭でも使えるように、薬草を使ってハーブボールを作りました。また農場では多くの薬草も植えているため、求めに応じて参加者にも苗を配布しました。

5. コミュニティ・マーケット

@アレンヤー実験農場

これまでノーンメック村とその周辺村において、有機農業の生産技術や知識の向上を目指して活動してきました。また自然資源の加工や商品化も考慮に入れた農業デザインを学び、自ら行う農業に応用する農民たちも増えてきました。

そして将来、有機農業の生産をコミュニティ・ビジネスにつないでいくためには、自分たちの生産物売るマーケットが必要であると考え、2022 年 5 月より村人たちの手でコミュニティ・マーケットを始めました。2022 年度は月に 1 回、全 12 回開催することができました。

以下のようにコミュニティ・マーケット開催の目的を設定し、事業を進めています。

- ①市場の設営、運営、販売方法などを体験して学ぶ
- ②市場での販売に合わせた材料や加工品を用意することで農業経営の力をつける
- ③有機農業で作る安全な食の供給を通じて、消費者と生産者をつなぐ
- ④村人の健康のためによい市場にする



コミュニティ・マーケットは、基本的に月に一度第3土・日曜に、アレンヤ実験農場の土地を無償で利用させてもらい、開催しています。金曜日に設営し、市場を閉めた日曜日には参加者全員で片付け、ゴミを持って帰ります。帰る前には必ず振り返りを行い、次回開催について話し合っています。

売り手は、ノンメック村と周辺村、および他県のネットワークからも参加し、毎回約 20 人前後が自分たちの生産・加工物を売っています。知り合いが知り合いを呼ぶ形で広がり、有機農業による安全な食材や加工品、自然で健康によいものであれば何でも売ることができますが、中間業者や仲買いは受け入れていません。

顧客は、実験農場の近くに住む人、参加者の知り合い、ネットや SNS を見た人、通りすがりで看板を見て立ち寄った人などでした。一度来てくれた人がリピーターとなってくれ、また口伝で知り合いを誘ってくれる例もありました。

売り物は、季節に応じた生の野菜(レモングラス、しょうが、タケノコ、こぶみかんの葉、唐辛子、タマリンド、ゆずなど)、果物(グアバ、マンゴー、バナナ、パイナップルなど)、地元の料理(焼き鳥、鶏スープ、蒸した魚、蒸し芋など)、お菓子(揚げバナナ、もち米菓子、ドーナツ、サトウキビジュースなど)、薬草とタイ方医薬、ハーブボール、草木染 T シャツ、苗木、堆肥など多様なものです。類似した売り物を持ってきた場合、同じブースで販売したり、重複しないように前もって調整したり、競合することなく売り手たちが話し合いで決めていました。また売れ残りは、地元の村で商売をする人が買いとって自分の村で売り、無駄がでないよう配慮していました。

10月28日には、コミュニティ・マーケットの関係者であるノンメック村および周辺村住民17人が、マーケットの視察に行きました。ムクダハーン県ドンルアン郡ドンルアン行政区タイブーン村の薬草・野菜マーケットを見学し、同県ノンスーン郡ノンヤーン行政区有機農業農園を訪れ、売するための農業経営について学びました。

またコミュニティ・マーケットでは、販売だけではなく、ワークショップやイベントも同時に開催しています。毎月ではありませんが、売り手の誰かが自分の商品の作り方を伝授したり、子どもの日に合わせて子ども向けの音楽を演奏したり、有機農業に関わる経験の共有を行う場を設けて、売り手も買い手も含めた参加者が誰でも学びながら楽しめる場づくりを心掛けています。

◆コミュニティ・マーケットで行ったワークショップ

マーケット開催日	ワークショップ内容/研修
6月18、19日	木の葉を使った草木染
7月16、17日	豚まんづくり
8月20、21日	ドーナツ作り
9月17、18日	—
10月22、23日	—

11月6日	マーケット整備・整地 参加者:売り手など20人
11月19、20日	—
12月17、18日	野菜の加工
1月14、15日	野菜の加工 子ども向けイベント(15日は子どもの日)
2月18、19日	野菜加工、苗木販売
3月18、19日	—
4月8、9日	—
5月20、21日	有機農業、農業の多角経営、堆肥、EM団子作りなど、水利管理 参加者:ノーンメック村および周辺村の住民と関心のある者約23人

参加者の声

市場のことが学べた。これから効率よく売るにはどのような農産物をいつ植えたらいいのか、農業計画を考えるようになった。
自分自身の訓練にもなるし、孫にも売るのを手伝うことによって責任感を学ばせることができる。
多くの人が売っていて、その中で自分も売ることができてうれしかった。
いろんな人に出会えて、おしゃべりし、情報交換し、助け合う。そんな場だった。
私たちのマーケットを知る人が増えたので、次の生産物を継続的に提供するために計画をたてないと、。
近くに売る場所があると、収入が増える。



からも継続してマーケットを開催していく予定です。

コミュニティ・マーケットが目指しているのは、売り手たちが協力してマーケットの場を作り上げるところにあります。販売方法を学ぶだけでなく、仲間や顧客と話し合い、交流し、楽しみながら新たなネットワークを築くことに重点を置いています。売り手と買い手が、対等な立場でお互いを助け合う家族や親せきのような関係になるようなマーケットを作るために、毎回話し合いを重ねています。商品も多様化してきました。マーケット開催が、確実に生産者や加工者の刺激になりました。これか

6. 牛銀行プロジェクト

2013 年から青少年の就労支援基金の設立を目指して始めた牛銀行プロジェクトも9年目を迎えました。様々な困難を乗り越え、牛の管理に責任を感じるようになり、牛銀行委員会の結束は強くなりました。そして村人たち自身が決める地域福祉を支援する事業となってきました。

コミュニティのために協働で牛を育てる責任感を持つ人であることを条件に周辺の村も対象として新たに飼育者を募集しました。その結果、最近ではノンメック村だけでなく隣村の住民にも飼育してもらっています。牛銀行委員会やスタッフたちが飼育された牛の様子を定期的に確認し病気などの相談に乗っています。

2022 年度は前年に引き続きランピースキンが流行し、多くの牛に影響を与えました。噂ではそのワクチン接種によって牛が不妊になると言われています。牛銀行の牛のうち 1 頭も何度種付けをしてもなかなか妊娠に至りませんでした。今後は、牛マーケットの動向と牛の状態を見ながら、牛銀行委員会で相談の上、対処していく予定です。

牛銀行で生じた利益を毎年子どもたちに分配していましたが、2022 年度は一度保留にし、次回にまとめて奨学金として配布する計画です。



【成果と課題】

2022 年度は、新型コロナウイルス感染症による様々な制約もなくなり、多くの活動を再開させることができました。特に 2022 年 5 月から始めたコミュニティ・マーケットは有機農業生産物の販路確保であるだけでなく、学びや交流の場も提供します。村落を越えるコミュニティの人々との出会いから、村人も様々な経験や知識を共有し、ネットワークを広げてきました。有機農業、堆肥づくり、製品加工などの支援事業は、すべてこのコミュニティ・マーケットに集約し、マーケットの場を中心にほとんどすべての活動を行うようになりました。農業や生産物加工に対する意欲が高い 20 数世帯の有機農業グループもでき、コミュニティ・マーケットの運営にも協力的です。

一方で、コミュニティ青年ボランティア(子どもの居場所づくり)事業は、様々な事情により中止となりました。これまでボランティアで来てくれていた青年が、結婚して村を出てしまったり、少子高齢化によって村にいる子どもの数が減少したりといった理由で、村内のスタッフの家でいつでも開放できる場を提供できなくなりました。しかしその他の活動では、親や親族とともに参加する子どもの姿が見られ、コミュニティ・マーケットでは忙しい大人に代わって店を切り盛りする子どももいます。今後、子どもを見守るコミュニティ作り事業として、子どもたちをどのように育てたらいいのかを村人たちと話し合いながら新たに計画を立てていく予定です。

C.海外プロジェクト助成事業

カンボジアの NGO である Khmer Community Development(以下、KCD)を通じて、ベトナム国境沿いの村々の子ども会活動(ピース・クラブ)と有機農業推進事業を支援しています。コロナ感染症拡大によってロックダウンが長く続きましたが、2022 年度はスタッフも事業対象地に行けるようになり、様々な事業や活動も再開しました。



事業対象地であるプレックチュレイ村とその周辺村は、ベトナム国境と川で接しています。コロナ禍の前後で人々の生活に大きな変化を与えたことは、国境の閉鎖です。それまで市場、病院、学校などをベトナム側の施設に頼っていた多くの村人が、国境を越えることができなくなり、カンボジア国内で資源等を確保しなければならなくなりました。特に子どもに関連する変化では、これまでベトナム側の学校に通っていたベトナム系の子どもたちが国境を越えることができなくなり、カンボジア国内で学習機会を求めようになったことをあげることができます。カンボジア側の学校では、クメール語を話さなければならないため、これまでベトナム語だけで生活していた子どもたちがクメール語を学び、学校でもクメール語を少しずつ話すようになりました。

またコロナ禍後の変化として、それまで人が集まる活動がなかなかできなかった村の一つが、コミュニティ図書館設立のために動き始めました。年に 4-5 か月水没してしまうチュロイスナオ村で、村人たちと協働でC4Cも寄付集めに尽力し、5 月末には小学校の校庭に小さな図書館を建設することができました(詳細は別項目で)。

一方、有機農業推進事業では、コロナ禍前までカンボジア人農民をタイに招聘して有機農業研修を実施していましたが、今に至るまで再開していません。

2021 年度にオンラインでタイ人からカンボジア人スタッフが草木染の技術を何度も学びましたが、現在では村のローカルスタッフと子どもたちに、青少年の能力向上事業の一環として教え、彼らはもっと小さな子どもたちに環境教育の一環として一緒に草木染ワークショップを行い、技術を伝えています。

◆子どもに関する研修ガイドライン作成

子どもの権利向上に向けた青年運動(Young People Movement for Child Rights ; 略称 CCYMCR)というネットワーク組織からの依頼を受け、子ども会設立プロセスと研修ガイドラインを作成するために、KCD がパイロット研修を実施することを支援しました。これまで KCD は多くの村で子ども会をゼロから立ち上げる支援を行い、その経験も豊富なことから教えてほしいという要望があったからです。CCYMCR は、KCD が支援する子ども会も参加する全国青少年ネットワークで、多くの子ども・青年会がメンバーとして参加しています。これまでも様々なセミナーやワークショップなどで協力関係にあり、今後も他の地域の子どもの会同士の交流を促進するためにも、CCYMCR のスタッフを研修するガイドラインとして役に立つものです。

◆カンボジア・コミュニティ図書館建設プロジェクト(および応援サポーター募集キャンペーン)

KCD の活動対象地域の中にあるチュロイスナオ村において、村人たちによるコミュニティ図書館建設の計画がありました。チュロイスナオ村は、毎年 4-5 か月間洪水で村や小学校も冠水してしまうところなのです。そのため

子どもたちは何か月も小学校に行けず、遊び場也没有せん。子どもたちがいつでも集まって、勉強や読書ができるような場所を作ろうと、村の大人たちが相談し、建設計画を立てましたが、その建設資金が不足しているという話を KCD スタッフから聞いた副代表理事・加藤が現場を訪れ、小学校の校長らと話し合った後、日本の C4C 理事会で検討し、C4Cとして一部建設資金を援助することにしました。また、足りない予算はカンボジアと日本の両方でファンドレイジングを行い、寄付を集めることにしました。日本では 46 人、カンボジアでは 200 人以上の寄付者から支援を得ることができ、5 月末にコミュニティ図書館が小学校の校庭に完成し、村人が管理・運営することになりました。



【成果と課題】

コロナ感染症拡大の影響によって、中止、延期されていた事業が再開しました。カンボジア人スタッフたちも子どもたちを見守りながら、彼らが活動しやすい環境を整えることに尽力していました。活動する対象地域が複数であるため、子ども会の活動やリーダーとして成長度は村によって異なります。そのためいろいろな地域で育ち始めた子ども会のメンバーが他の地域に出向いて、地域を越えた交流を実施し、それぞれ地域での活動経験を紹介し合う場づくりなどを行いました。そのような媒体を通じて、新しく子ども会を設立した村の子どもたちの視野を広げ、現在の地域活動に刺激を与えていけるような支援活動を行っていました。

村人発案のコミュニティ図書館建設を支援する事業は、C4C として初めてのことでした。また KCD にとってカンボジア人に寄付をお願いするクラウドファンディング活動は初めてのことでした。様々な制約はありましたが、多くの人々に応援していただけました。また一方でやり方に関しては、再考する部分も多くありました。今後の活動に生かせる経験になりました。

2022 年度は、子ども会活動やコミュニティ図書館建設支援など、子どもに重点を置いた事業を実施しました。一方で有機農業支援事業は滞ったままでした。2023 年度はタイとカンボジアの有機農業研修を通じた交流事業を行う予定にしています。

1-2. 国内支援事業「宮城県における連携・協働で取り組む福祉・防災学習推進事業」

『東日本大震災で甚大な被害を被った宮城県において、各地域全体の福祉力・防災力を高めるとともに、普段から、住民一人ひとりの命と暮らしを守ることを目指す。』

このことを実現するために、宮城県内で取り組まれる児童・学生・青年層が主体的に参画する福祉・防災学習の実施について、実施を検討・計画されている地元の社会福祉協議会・NPO・学校等と連携・協働し、次のようなことに取り組みました。

特に今年度においては、東日本大震災の経験を教訓として今後につないでいくための防災ゲームの普及・啓発活動、防災レシピカレンダー製作を通じた担い手育成、県内を中心とした福祉・防災学習実践支援などを通して、東日本大震災から10年以上が経過した宮城における東日本大震災の教訓の伝承や、福祉・防災学習推進の担い手育成を目指しました。

1、福祉・防災学習プログラム・ツール研究開発事業

● 東日本大震災の経験を教訓としてつないでいく防災ゲームの普及・啓発活動

東日本大震災の風化が進む中、震災発生直後から県内各地でおこった助け合い活動を今後教訓としてつなげていく防災ゲームを2018年度から作成～2021年10月に完成し、全国各地で普及啓発のための体験会の開催やゲームの販売を行ってきました。



2022年度は全国各地からご注文をいただき、年度当初あった200セットが年度末にほぼ完売となりました。

青森県七戸町・平内町・横浜町、宮城県気仙沼市・美里町・色麻町・大崎市・仙台市、群馬県安中市、滋賀県、奈良県、大阪府大阪市、鳥取県で体験会の講師対応を行い、主催体験会を8/19・9/26に大阪府社会福祉会館、1/24にオンラインで開催しました。

2、福祉・防災学習担い手育成事業

● 防災レシピカレンダーの製作を通じた若者世代への教訓の伝承、地域連携

宮城学院女子大学ボランティアサークルFood and Smile!(FAS)と東六郷・東部かあちゃん'ずの協力を得て、誰にでも必要な「食」という切り口から防災が日常に溶け込み取り組んでいただきやすくなれば、若い世代が東日本大震災の教訓を学ぶきっかけになればと考え、防災レシピを掲載した2023年のカレンダーの製作に取り組みました。



宮城学院女子大学ボランティアサークルFood and Smile!(FAS)の皆さんに考案いただいた防災レシピを東六郷・東部かあちゃん'ずの皆さんに試食していただきレシピの改良を重ね、カレンダー掲載写真撮影の際はFAS卒業生のフードコーディネーターに協力をいただいたりと、様々な方と力を合わせて作成に臨むことができました。

2022年11月に500冊が納品され、関係先への配布や研修会場等での対面販売・インターネット販売等を通じて、449冊を世に出すことができました(販売289冊・配布160冊)。



2023年3月26日には3月掲載レシピ(アルファ米で！手まり寿司、たっ

ぷり!きのこスープ、もちふる牛乳)の料理教室を実施し親子2組が参加しました。

3、福祉・防災学習実践支援事業

県内で実施される福祉・防災学習事業について、1つの地域で実践支援に取り組みました。

- おおさき福祉学習推進事業(2016年度～継続)主催:大崎市社会福祉協議会
地域共生社会の実現に向けた、地域福祉推進の人材育成を目的とした福祉学習事業を実施。2022年度は本所・7支所の福祉学習担当職員とともに、地域性を踏まえた地域住民とともに取り組む福祉学習プログラムの開発に取り組みました。(HumanBeingはアドバイザーを担当)(年間訪問回数…6回)
- 防災ゲームを活用した研修会講師対応
 - ・2022/10/29 災害ボランティア講座(気仙沼市社会福祉協議会)
 - ・2022/11/24 福祉教育サポーターフォローアップ講座(美里町社会福祉協議会)
 - ・2022/12/8 防災すごろく体験会(色麻町社会福祉協議会)
 - ・2023/2/1 福祉レクリエーション講座(大崎市社会福祉協議会田尻支所)
 - ・2023/3/7 防災勉強会(東六郷・東部かあちゃん'ず)

4、福祉・防災学習推進のためのネットワーク構築事業

県内外で開催された研修会・学会大会等への参加を通じ、福祉・防災学習にかかわる情報収集・提供、ネットワーク構築に取り組みました。また県内社会福祉協議会を訪問し、今年度の事業予定や地域の状況・活動の課題等についてヒアリングを行いました。

- ・2022/7/8 宮城県社会福祉協議会主催 第1回福祉教育学習会参加
- ・2022/11/26～27 日本福祉教育・ボランティア学習学会 神戸大会参加
- ・2022/3/9 日本福祉教育・ボランティア学習学会 ネットワーク委員会出席
- ・2022/4/19、5/17 岩沼市社会福祉協議会訪問
- ・2022/4/20 美里町社会福祉協議会・大崎市社会福祉協議会訪問
- ・2022/5/23 南三陸町社会福祉協議会訪問

5、普及啓発のための情報発信事業

宮城での実践を活かし、県外での研修会講師対応、メディア出演などに取り組みました。またホームページやSNSによる情報発信を行いました。

- ・2022/8/3、10/27、10/28 地域における福祉学習実践事業(七戸町社会福祉協議会・平内町社会福祉協議会・横浜町社会福祉協議会)(青森県社会福祉協議会指定事業)
- ・2022/11/15 滋賀県市町社会福祉協議会会長会職員部会交流会
- ・2022/11/22 大阪市災害ボランティアセンター運営者研修(大阪市社会福祉協議会)
- ・2023/1/14 令和4年度災害ボランティア研修(奈良県社会福祉協議会)
- ・2022/2/9 福祉教育推進セミナー(鳥取県社会福祉協議会)
- ・2022/2/10 防災学習ボランティア養成研修(群馬県安中市社会福祉協議会)
- ・2022/9/1 ニッポン放送「あさぼらけ」取材対応

【成果と課題】

福祉・防災学習プログラム・ツール研究開発事業では防災ゲームの体験会にご参加いただいた方からのご購入だけでなく、インターネット検索でたどり着いた方からの問い合わせもあり、実際に起こったことに基づいた、また楽しみながら学べる、幅広い方を対象とした防災学習教材が求められていたことを改めて感じています。ひとつのツールを生み出したことで次のツール制作への期待の声もいただいております。災害が各地で頻発する昨今、防災学習教材へのニーズはますます高まっていると感じました。防災ゲームの普及においては販売するだけでなく、活用に向けて、研修会の開催や各種情報提供などのサポートも並行して必要であると感じました。

福祉・防災学習担い手育成事業で作成した防災レシピカレンダーは家庭で使用いただいている他、教材として学校で使用いただいたり、町内会や防災研修会で配布いただいた等の声をいただいております。また、FASからは地域の方と協力して活動できるのは嬉しい、かあちゃん'ずからは若い学生と一緒に取り組めて励みになる、という声をいただいております。「食と防災」をテーマに世代を超えたつながりをつくれたことも成果のひとつとして実感しています。

料理教室も参加者から好評で、「遅すぎず、早すぎず、大変わかりやすかったです」「改めて防災について考えるきっかけにもなりましたし、最低限の調理器具で簡単に手作りできて良かったです」などと感想をいただきました。コロナ禍で料理教室を実施できず、FASに入って初めて講師をすることができたと話す2年生のメンバーもいて、コロナ禍において停滞していた学生の活動のきっかけの一つをつくることもできました。

2. 文化交流活動支援事業

2-1. スタディツアー

2021年度に続き、新型コロナウイルスの影響で、スタディツアーを実施しませんでした。

◆2022年8月タイ・カンボジア渡航帰国報告会

10月22日@オンライン 参加者4人(会員2人、その他関心のある者2人)

副代表理事・加藤が3年ぶりにタイとカンボジアの連携団体を訪問し、現状を視察してきました。コロナ禍後の各国事業の現状を会員に伝える機会としてオンライン報告会を設けました。

タイ・ノーンメック村コミュニティ事業もカンボジア・KCDとの協働事業も、それぞれスタッフは新型コロナウイルス感染症の影響で縮小、もしくは中止していた事業を再開し、以前にも増して意欲的に働いていました。そしていくつかのコロナ禍後の新しい事業も紹介しました。特に、カンボジアでは年に何か月も水没してしまう村(チュロイスナオ村)を訪問し、村人たちがコミュニティ図書館建設を計画していることを聞き、日本からの何らかの応援を考えるために村の状況などを紹介しました。参加者から具体的な質問もあり、関心の高さを知ることができました。

2-2. カンボジア・コミュニティ図書館建設応援サポーター募集キャンペーン

カンボジアのチュロイスナオ村コミュニティ図書館建設プロジェクトを応援するために、11月から2月までの期間、足りない建設費用をカンボジアと日本で同時に寄付募集を実施しました。日本では、SNSやホームページに情報を載せるだけでなく、オンラインイベント(全3回)を開催し、カンボジア図書館建設プロジェクト進捗レポート(全3回)を作成・配布して広報に努めました。

日本では総勢46人の方から総額516,100円のご寄付を

いただきました。図書館建設費の総予算費11797.64米ドルの約30%にあたります。カンボジアでは、KCDスタッフがサイクリング・キャンペーンを実施したり、地方自治体の副郡長や村長などが広く地域の人々に呼びかけてくれ、全体の約30%の寄付を集めました。残りはC4Cが海外プロジェクト助成から捻出しました。



2-3. Zoom でつなぐ C4C4か国会議—国際ネットワーク交流

新型コロナウイルス感染症の影響によって、各国の事業が滞るなか、スタッフ間のオンライン交流のアイデアが出て、2021年度はC4Cと連携・協力して活動する各国のスタッフから、8回オンラインで交流し、お互いの活動や現状などを紹介しあいました。異なる地域で、異なる対象に対して、異なる方法論を持って活動する様子を知ることで、自らの活動への刺激となったようで、2022年度も引き続き、回数を少なくして開催を続けることにしました。

事業の代表が語るだけでなく、ローカルスタッフや事業対象者もオンライン報告に参加し、画面を通じてですが、共通の課題や認識を持つ人々と接することができ、自分自身の活動を振り返る機会になりました。オンラインで行う国際ネットワーク交流は、今後も継続する予定です。

	日時	話題提供者	話題
第9回	6月 26日	HumanBeing 菅原清香 佐々木優花(宮城学院女子大学)	C4Cと協力関係にある、栄養士を目指す大学生サークルFASが「食と防災」のテーマに取り組むようになった経緯、地域での経験
第10回	9月 17日	タイ・トウック	タイでの活動・コミュニティ・マーケットについて現場から実況中継
第11回	10月 23日	カンボジア・KCD代表ソーカ 子ども会4か所のメンバー	カンボジアでの子ども会活動を4か村の子ども会のメンバーが紹介
第12回	4月 22日	フィリピン・JPCOM-CARES代表 マリベル 保護者会代表チョナ	フィリピンでの保護者会の活動を保護者代表が紹介

2-4. カンボジアとつなぐオンラインイベント(全3回)

カンボジア・チュロイスナオ村コミュニティ図書館建設プロジェクトサポーター募集キャンペーンを11月から2月までC4C事務局で行いました。その寄付募集と並行して、オンラインでカンボジアとつなぎ、チュロイスナオ村の村人や子どもたちに、日常生活やコミュニティ図書館に対する思いについて語ってもらいました。

参加者募集はイベント管理サービスPeatixを利用しました。日曜日の昼間開催(11時より)ということで、参

加者の数は多くありませんでしたが、「カンボジア」、「コミュニティ図書館」、「洪水」のキーワードで検索された方が初めて C4C の活動に参加し、いろいろな質問をしてくださいました。

カンボジアのチュロイスナオ村は、電波状況があまりよくないため、2 回目以降は通信環境のよい別の村で、村人と子どもたちが緊張しながらも、オンラインで写真やビデオを観ながら発言してくれました。恥ずかしそうにウェブカメラに向かう子どもたちの顔が印象的でした。カンボジアの村人や子どもたちにとって、オンラインで海外とつないで話す、このようなイベントは初めてでした。また C4C にとっても、新しい協力者や支援者と出会う新しい方法となる可能性があることが確認できました。

日時	内容
12月11日	第1回「洪水の中で暮らす子どもたち」参加者4人
1月15日	第2回「洪水とともに生きる人々」参加者3人
2月12日	第3回「農村の子ども会活動—子どもたちの夢」参加者8人

3. 視察・研修・ワークショップ事業

3-1. 研修事業

2022 年度は実施することができませんでした。

3-2. 国内 IDoCafé(あい・どう・かふえ)事業

2022 年度は実施することができませんでした。

4. パートナーシップ推進事業

4-1. 調査事業

(1)宮城県における地域一体で取り組む福祉・防災学習推進事業のための調査

調査実施者:Human Being 菅原清香会員

宮城県および周辺県等において、国内事業「福祉・防災学習推進事業」の実施主体を訪問し、ヒアリング調査、研究、事業実施に関する意見交換を行いました。C4C の各事業と当事業との調整も行いました。

5. 情報提供事業

5-1. ホームページ、ブログ、Facebook による情報発信

2022 年度は、C4C だよりは、vol.7 の1回の発行となりました。カンボジア・コミュニティ図書館建設サポーター募集事業に関連した瓦版は3回発行し、プロジェクトの進捗状況をお届けしました。

5-2. イベント参加

◆ワンワールドフェスティバル

日時:2月4-5日 10:00-17:00@北区民センター他

新型コロナウイルス感染症の影響で3年間オンラインで開催されていましたが、今回は感染症対策をしつつ、会場にて開催されることになり、C4C も活動紹介ブースを出しました。久しぶりに開催されたフェスティバルでしたが、人数制限などがあったせいも、密になることもなく、周りの参加団体の方々とも話す時間も、久しぶ

りの国際イベントを楽しみました。

6. 組織運営

◆2022 年度会員について

2022 年度会員・寄付者

人数の変動

		2020 年度	2021 年度	2022 年度
正会員数	個人	12	13	14
	団体	0	0	0
賛助会員数	個人	15	20	20
	団体	0	0	0
使途指定寄付	指定寄付(宮城防災)	1	0	0
	フィリピン・奨学金	1	0	1
	タイ・ノンメック村	0	1	1
	カンボジア・コミュニティ図書館建設	—	—	44
一般寄付		6	9	7

新型コロナウイルス感染症の事業に対する影響は少なくなりましたが、まだスタディツアーなどの国際交流事業は再開しなかったため、会員を勧誘する機会があまりありませんでした。しかしオンラインや郵送で、カンボジア・コミュニティ図書館建設応援サポーター寄付を募集し、総勢 44 人の方からの寄付をいただきました。そのうち数名は会員にもなってくださいました。



2022年度 貸借対照表 (2023年5月31日現在)

一般社団法人コミュニティ・4・チルドレン 本来事業の会計 (円)

資産の部		負債の部	
流動資産		流動負債	
現金	28,113	未払金	247,031
普通預金	623,875	前受金	550,000
流動資産合計	651,988	預り金	5,830
固定資産		流動負債合計	
什器備品	159,956	802,861	
固定資産合計		固定負債	
159,956		固定負債合計	
		0	
		負債合計	
		802,861	
		正味財産の部	
		前期繰越正味財産	
		328,340	
		当期正味財産増減額	
		-319,257	
		正味財産合計	
		9,083	
資産合計	811,944	負債及び正味財産合計	811,944

2022年度 本来事業の会計 財産目録
2023年5月31日現在

(円)

科目	摘要	金額		
資産の部				
流動資産				
現金		28,113		
普通預金		623,875		
--三井住友銀行		605,859		
--ゆうちょ銀行 総合口座		8,016		
--ゆうちょ銀行 振替口座		10,000		
流動資産合計			651,988	
固定資産				
什器備品		159,956		
固定資産合計			159,956	
資産合計				811,944
負債の部				
流動負債				
未払金		247,031		
前受金		550,000		
預り金		5,830		
流動負債合計			802,861	
固定負債				
固定負債合計				0
負債合計				802,861
正味財産合計				9,083

2022年度 損益計算書（予算対比）

2022年06月01日～2023年05月31日(配賦)

一般社団法人コミュニティ・4・チルドレン 本来事業の会計

(収入の部)			
科目	予算額	決算額	予算残額
1. 会費収入			
正会員受取会費	300,000	140,000	160,000
賛助会員受取会費	300,000	110,000	190,000
2. 寄付金			
一般寄付	12,000,000	13,547,000	-1,547,000
- フィリピンのしょうがい児者応援寄付	0	12,705	-12,705
- 使途指定寄付(タイ)	0	5,000	-5,000
- カンボジアコミュニティ図書館建設指定寄付	0	516,100	-516,100
3. 事業収入	0	0	0
4. 民間助成金	0	0	0
5. 雑収益			
受取利息	0	32	-32
当期収入合計 (A)	12,600,000	14,330,837	-1,730,837

(支出の部)			
事業費			
科目	予算額	決算額	予算残額
■NGO支援事業			
海外支援事業費			
フィリッ・JPCOM-CARES支援	3,474,151	3,474,151	0
タイ農村コミュニティ支援	2,255,802	2,255,802	0
調整にかかる海外渡航費等	200,000	518,390	-318,390
事業助成事業費			
海外プロジェクト助成（カンボジアKCD）	2,400,000	2,866,390	-466,390
調整にかかる海外渡航費等	200,000	20,719	179,281
日本支援事業費			
宮城県における福祉・防災学習推進事業	690,000	1,133,731	-443,731
■NGO支援事業計			
	9,219,953	10,269,183	-1,049,230
■文化交流活動支援事業			
フィリッ・スタディツアー事業費	0	0	0
タイ・スタディツアー事業費	0	0	0
国際交流事業費	0	0	0
カンボジア・コミュニティ図書館建設事業	0	500,300	-500,300
■文化交流活動支援事業計			
	0	500,300	500,300

■視察・研修・ワークショップ				
	国内DoCafe事業費	30,000	0	30,000
	招聘視察・研修事業費	100,000	0	100,000
	■視察・研修・ワークショップ計	130,000	0	130,000
■パートナーシップ推進事業				
	調査事業費	2,700,000	2,400,000	-300,000
	■パートナーシップ推進事業計	2,700,000	2,400,000	-300,000
■情報提供事業				
	情報提供事業費	30,000	53,317	-23,317
	■情報提供事業計	30,000	53,317	-23,317
	事業費支出計	12,079,953	13,222,800	-1,142,847

	科目	予算額	決算額	予算残額
管理費				
	給料手当	800,000	557,600	242,400
	旅費交通費	50,000	32,800	17,200
	諸謝金	0	120,000	-120,000
	会議費	10,000	24,510	-14,510
	通信運搬費	30,000	55,646	-25,646
	消耗品費	90,000	104,957	-14,957
	印刷製本費	30,000	87,246	-57,246
	保険料	60,000	65,380	-5,380
	支払地代家賃	120,000	120,000	0
	諸会費	15,000	25,000	-10,000
	支払手数料	20,000	22,000	-2,000
	租税公課	2,000	2,200	-200
	減価償却費	0	159,955	-159,955
	法人税、住民税及び事業税	70,000	50,000	20,000
	管理費計	1,297,000	1,427,294	-130,294
	当期支出費用合計 (B)	13,376,953	14,650,094	-1,273,141
	当期収支差額(A)-(B)		-319,257	
	前期繰越金 (C)		-448,612	
	次期繰越金 (A) - (B) + (C)		-767,869	

2023年度(2023年6月1日～2024年5月31日)事業計画書

1. NGO 支援事業

1-1. 海外支援事業

フィリピン国 JPCOM-CARES への支援とタイ国ノンメック村コミュニティ支援事業は継続します。各地の現地の団体や個人が主体的に助成金等の多彩な財源を獲得できるよう、C4C からもアドバイスをを行います。

A. JPCOM-CARES(フィリピン共和国バギオ市、ハッピー・ハロー村、ベンゲット州カバヤン町)

引き続き、子どもたちが必要とする療育支援や将来につながる自立生活プログラムの提供を継続し、一人ひとりの強みや得意が育っていくような支援を行っていきます。また、障がいや障がい児・者への啓発を目的に、地域を訪問し、自治体と協働でセミナーを開催してきました。繋がった地域において、しょうがい児・者の地域社会への参加が促進されるよう、参加者自身が考える地域づくり、活動づくりをサポートできるような取り組みにしています。初めての試みとして取り組んでいる保護者による保護者のための生計支援研修は、収入に繋がる技術の習得・向上を目指し、保護者とアイデアを出し合い、よりよい研修づくりを行います。

B. タイ・ノンメック村コミュニティ支援(タイ王国コンケン県)

ノンメック村事業では、ローカルスタッフを中心に、これまでと同様に、安全な食をもたらす知識や実践として有機農業や森林保全活動を続け、健康にいい食生活を目指します。活動拠点を本格的に有機農業実験農場に移し、農場の地所の一部に月例マーケットを設営し、農業経営や有機農業技術を学ぶワークショップも同時に行いながら、マーケットを通じて、より広いネットワークづくりへと向かいます。

子どもたちを支えるためには、コミュニティ自体の繋がりを強化しなければならないと考え、これまで以上に稲作や植林活動における『結』へ多くの人の参加を求めていき、村落社会を越えたコミュニティ作り、ネットワーク拡大に向けて、より一層有機農業を中心とした活動を広げます。それが最終的には子どもたちに身近な希望を与え、地元や家族を愛する気持ちを培うと考えます。

C. 海外プロジェクト助成(短期の事業単位での助成)

Khmer Community Development(KCD) -カンボジア国カンダール州プレックチュレイ村とその周辺村において、子ども会活動の支援を継続して行います。また子ども会のネットワークづくりも側面支援します。その他、コロナ禍で実施できなかったカンボジア人をタイで研修させる有機農業研修を再開します。

1-2. 国内支援事業

A. 宮城県における地域一体で取り組む福祉・防災学習推進事業

コロナ禍の影響が落ち着いてきたため、県内外のこれまでの関係先を巡回し、改めて、現在の東日本大震災からの復興の状況や地域づくり活動の状況を把握し、地域の福祉力防災力を高めるために求められる取り組みや姿勢についてヒアリングを行います。

また東日本大震災の経験を教訓として今後につないでいくための防災ゲームの普及・啓発活動、防災レシピ

カレンダー製作を通じた担い手育成、県内を中心とした福祉・防災学習実践支援などを通して、東日本大震災から10年以上が経過した宮城における東日本大震災の教訓の伝承や、福祉・防災学習推進の担い手育成に引き続き取り組んでいきます。

B.国内プロジェクト助成

日本国内で子どもたちを中心とした地域づくり等を行っている団体のヒアリング調査・視察を実施し、対象事業を検討し、支援要請があった場合に、別に定める助成要項に沿ってその都度検討します。

2. 文化交流活動支援事業

2-1. スタディツアー

A. タイ・スタディツアーの実施

8月にタイ・ノーンメック村でホームステイを実施する予定です。

B. フィリピン・スタディツアーの実施

実施を検討しています。

C. カンボジア・スタディツアーの実施

2024年2月頃、チュロイスナオ村のコミュニティ図書館を訪問するツアーを検討中です。

2-2. 国際交流事業

オンラインでの交流を検討しています。

3. 視察・研修・ワークショップ事業

3-1. 視察・研修事業

理事、社員、寄付者、専門家を中心とした現地視察、連携団体に所属するスタッフ、利用者への研修、および連携団体間の交流を実施します。

- ・ 日本、タイ、フィリピンをはじめラオス、カンボジアなどのアジア諸国で、C4C と関連する活動を行う団体、個人との相互交流を図ります。
- ・ 日本国内での現地報告会、講座や演習の開催、講師派遣
- ・ 子どもを中心とした地域づくり推進を目的とした講座や演習の実施、もしくは講師およびアドバイザーの派遣

3-2. 国内 IDoCafe 事業(年2回開催予定)

IDoCafe は、何らかの想いを形にし、社会に貢献しようとする人々が、ディスカッションを通じて新しいつながりを生み出す場です。国内での情報発信のために、オンラインと対面の両方で開催を計画します。

4. パートナーシップ推進事業

4-1. 調査事業

- ・ 日本、タイ、フィリピンをはじめ、ラオス、カンボジアなどのアジア諸国で、子どもたちを中心とした地域づくり等を行っている団体のヒアリング調査・視察を実施し、対象事業を検討し、パートナーづく

りを進めます。

- ・ 昨年度に引き続き、アジアや日本で活動する団体へ調査員を派遣すると同時に、これまで出会った団体との交流を深め、現場の状況やニーズから支援のやり方やあり方の相互理解を進めます。
- ・ 宮城県における福祉・防災学習推進事業を推進するための調査研究・調整を年間委託して行います。

4-2. ホームページやブログなどを通じて、C4C の取り組みを発信しパートナーづくりを進めます。

5. 情報提供事業

5-1. ホームページ、ブログによる情報発信

ホームページや Facebook、C4C だよりの発行や活動ブログの更新を通して、C4C の取り組みを発信していきます。

5-2. イベント参加

ワンワールドフェスティバル等、国際協力や地域づくりに関連する様々なイベントに参加し、C4C の活動を紹介します。

5-3. 支援キャンペーン

支援団体や支援事業への寄付や参加を呼びかけるキャンペーンを実施します。

5-4. 現地提携団体への情報提供

世界の動向をはじめ、活動をサポートする情報を提供します。

6. その他

上記の他、C4C の目的を達成するために必要な事業を実施していきます。

